

知覧小学校の創立期と

祖父の教科書

佐 多 ツル子

目 次

- 一 はじめに
- 二 知覧小学校沿革と明治初期の教育
- 三 明治十九年の諸学校令と祖父の教科書
- 四 おわりに

一、はじめに

私の郷土、知覧は、今にいたるも武家屋敷・城・馬場・城跡など遺跡のをとところどころに見る山深い田舎町である。昔から、山紫水明の地々とか、薩摩の小京都々とか呼ばれてきたということであるが、この呼び方には何か和歌的な匂いが感じられないであろうか。私は今度の夏休み、このレポートの資料を求めべく知覧小学校

に行ったのだが、その時校長先生は、「知覧では、何かことがあると和歌が寄せられる。私はほかにこんな所を知りません。ほんとうにおくゆかしい所ですね。」とおっしゃった。ほかの土地のことはわからないが、確かに私たちの所では伝統的に和歌が盛んであるようだ。中でも桂園派の歌風は、代々歌の名門に承けつがれ、現在もお伝わっているらしい。今では、名門だけでなく主婦その他一般の人々のグループができて、盛んに勉強しており、一時代前に比較して、いっそう一般の間に行きわたっているのではないかと思う。このことからわかるように、知覧は交通の不便な山奥だったにもかかわらず、昔から学問が盛んであったらしい。それは、士族が多かったことも関連するのであろう。知覧小学校は、昔の士族の学舎の伝統を受けて明治九年に創立された。

私は、この知覧小学校を明治二十八年頃卒業した祖父の教科書を中心にレポートしたいと思う。祖父は、明治十四年知覧の町から二

キロ程離れた部落の下級士族の長男に生まれた。したがって、祖父の小学校入学は、明治二十一年頃と思われるが、明治二十九年に小学校が全焼し、当時の学籍簿をはじめとして全てが、灰燼に帰してしまつたということで、確かめるすべがなかつた。しかし、祖父や祖父の兄弟の説明から考えても、恐らく二十一年に入学したのであらう。

手にはいつた教科書は、この祖父の高等小学校時代のもので、わずかしうな漢字には、拙いカタカナのふりがなが読める。祖父は、働きの妻を娶つて、苦勞らしい苦勞をしたこともなく一生を送つた幸せ者で、晩年はもっぱら孫の守りと、新聞読み、お寺通いに日を送つていた。死んで十五年たつが、私の大学生活をどう見ていくれるのだろうか。小さい時からいろいろ期待をかけて慈んでくれた祖父であつた。

二、知覧小学校沿革と明治初期の教育

祖父の在学時代を明確につかむために、また、当時の教育の状況を知るために、学校制度が次第に確立されてくる、明治初期の知覧小学校の沿革と、教育の実情をみてみよう。

知覧小学校沿革史

一、明治二年三月知覧学館ヲ旧領主御飯屋ノ敷地内ニ創設シ、池田市助、窪田休次郎、富永前之進ノ三氏ヲ教師トシ、主トシテ漢字ヲ教授ス。

一、明治四年二月第十郷校ト改称シ、漢字ニ加フル算術及習字科ヲ

以テス。数学教師岸要蔵、習字教師長崎幸内。

一、明治九年五月知覧小学校ト改称シ、佐多敬一郎氏等准訓導ニ新任、上席教師トナリテ正則学科ヲ教授ス。

一、明治十年丁丑ノ役起ルヤ壯丁多クハ従軍シ教師亦職ヲ罷メテ之ニ従フモノアリ。

一、明治十三年（一）月始メテ学務委員ヲ置ク。

一、明治十五年十月初メテ小学校卒業生十名ヲ出ス。

一、明治十六年第二回卒業生十五名。

一、明治十九年第三回卒業生十六名。

一、明治二十四年勅語謄本ヲ下賜セラル。

一、明治二十六年三月御真影ヲ下賜セラル。

一、明治二十六年六月高等科ニ、二ヶ年ノ補習科ヲ併置ス。

一、明治二十八年三月十一回卒業生十八名。

一、明治二十九年三月十二回卒業生十四名。

一、明治二十九年十一月、校舍火災ニ罹リ、御真影ヲ始メ、図書、器具、器械其他諸帳簿ニ至ルマテ悉皆烏有ニ歸ス。ヨリテ児童ハ東派本願寺説教所、西派本願寺説教所及川部郡役所ノ家屋ヲ私下ゲタル一棟ヲ仮校舍トシテ児童ヲ收容シテ教授セリ。

一、明治三十年三月第十三回卒業生三十名ヲ出ス。

この沿革について校長先生は、「明治五年に学制が頒布されたにもかかわらず、知覧ではすぐにこれを取り入れないで、ようやく明

治九年になってから知覧小学校と改称している。ここにも私は知覧人の特質があらわれているように思う。つまり、知覧の人は新しい物にすぐとびつけないのです。昔からそんな風気があるように思います。これも誇り高く自分たちの郷土を大事にしているからではないでしょうか。」という意味のことをおっしゃった。ついでに「卒論は、是非知覧の和歌について調べてみなさい。」とも言われた。知覧の出身ではないこの校長先生の、知覧を好ましく思っておられる様子はうれしかったが、明治九年に知覧小学校と改正したのは、それまでに改正できなかった理由があるのではなからうか。

旧薩摩藩で、薩摩置県後宮崎県に属している小林市史の中に次のような一節がある。

明治四年文部省が設置され同五年学制の公布があり近代的な教育制度の基礎が定められた。然し乍らこの学制は本県(鹿児島県)の人情と大きくかけはなれていたので直ちに学制通りの正則小学校を開設することは出来なかった。よって既設の郷校を交則小学校とし明治八年学務課を新設し同年末正則施行を県下に布達した。又正則施行の爲教員養成機関として同年小学正則講習所(鹿児島師範学校の前身)を開設し郷校教員の再教育を行いその再教育終了次第漸次正則小学校に切替えていった。即ち各地に芽ばえつゝあった郷校を母体として近代学校が成長していったわけで明治九年頃迄には

畷県下一円に正則小学校が普及した。

全国どこでも、大体この小林市のような有様であったのではなからうか。従って知覧小学校も同様の事情で明治九年に正則小学校として出発したのであらうと思われる。

また郷校については、郷校は当初各郷士族共立の私学として創

設され其内より藩校として番号を冠して本学校管轄に移つたものの様である。外城第一郷校は垂水におかれた。(中略)郷校教課内容は国学漢学の初歩に算術体操の新しい学課が加へられ、従来の寺小屋乃至私領や外城にあった漢学を主とした学館より一步進んだものであった。其設立及維持は最初は各郷士族の共立により或る程度の規模を備えて後本学校管轄に属したもので本学校乃至畷県とは経済上の関係はなかった。たゞ本学校より算術教師の派遣諸郷選抜の算術師員の本学校での養成等は官費によつたようである。設立の事情が斯如くであるから就学の生徒も殆んど士族の子弟に限られ平民の子弟は旧態依然たる寺小屋教育に委ねられていたようである。と説明してある。次に教科書に関して同じく小林市史の中に、当時藩当局が教育の普及に深く留意していたことは此頃多数の書籍を藩庁より出版した事によって窺はれる。薩藩の刊書は幕末に於ては天保及安政年間に相当盛んに行はれたが安政以後漸く途絶えていたものである。慶応より明治初年にかけて和漢洋の各種書籍の印刊が盛んに行われ二十部以上に達している。

- | | | |
|------|--------|----------|
| 慶応年間 | 軍防令講義 | 英国歩兵練法 |
| 明治元年 | 和訳万国公法 | 泰情公遺事 一冊 |
| 二年 | 慈徳公遺事 | 一冊 |
| 三年 | 神習草 | 一冊 |
| | 三字經 | 一冊 |
| 四治四年 | 箋註蒙求読本 | 三冊 |
| | 公私日用文章 | 一冊 |
| | 讀本五經 | 十一冊 |
| 明治五年 | 古文孝経 | 一冊 |
| | 讀本元明史略 | 四冊 |
| | 蠶頭字林玉篇 | 一冊 |
| | 増補字林玉篇 | 一冊 |
| | 讀本十八史略 | 七冊 |

女今川採種	一冊	女小学鑑	一冊
廢藩以前	大統歌	一冊	鳥津歴世歌
置具以後	博物新編	三冊	改刻小学
			四冊

正文章軌範評林三冊

これらの書目の多くは各学校の教科書に当てられた。(中略) 八年五月鹿兒島県で定めた変則小学校規則によれば前記の内三字経・孝経・書経・蒙求・史略・元明史略・博物・新編公私日用文章等が小学校各級教科書として採用されていたようである。*とある。なまえを聞くだけで、その内容が想像できるような、むずかしそうな感じを受けるものであるが、当時教育を實際受けていた人々は、どんな気持ちでこれらを学んでいたかをたずねてみよう。次は「知覧小学校五十周年記念誌」に寄せられた、同校の第一回卒業生の思い出である。

僕等は旧学制の郷校に於て所謂寺子屋流の教育から受けたのであるが、これまで畳の上で坐してゐて教授を受けたのが新学制となりてからはバンコ(腰掛)のことで当時は斯くいつたものである)に腰を掛けて「本を出して、本を開いて、墨をすって、墨すりをやめて」などの号令で教授せらるようになったことが珍しく面白かったことを覚えてゐる。僕等が時代は人の話でも聞く機会が至って少なかったのであるが、口授といつて時々先生の都合、又は時間の都合で、偉人の話又は孝子の話などを聞かされるのであった之れがなか／＼面白く珍しくて「口授をしてきかせやんせ」と先生に願つたものである。寺師友二先生(早く故人となられたが寺師珍之丞氏の父君)が人が坂に車を押す絵を板書して「手習は坂に車を押す如し油断をすれば後に戻るぞ」の古歌をひいて訓話されたのを面白く聞いたことを覚えてゐる。下等八級生(今の尋一)に入り読方として最初習つたのは五十音であつた。

それが読方書を習ふのは普通当前のことあらふが、振つたことは、その発音の仕方まで教へられてそれを又鵜飼の口真似で、口上発表をさせられたことである。例へば「ン」は入鼻音内音で鼻から入つて口の中ですーとぬけるのですのやうなのである。これがすむと単語といつて絵画入りでいろいろな物の名称を書いた掛図につき其の特効用などを教へられ、又之れを一々暗記したものであるが、その中にえんじゅ(槐)というのがあつて、「えんじゅは喬木の類であつて唐の勸学院(?)の庭にある木であります」とやつたことなどを覚えてゐる。之れが又終ると連語といつて「神は天地の主宰にして人は万物の靈なり」などのやうなのを書いた掛図につき其の読方解釈などを習つたものである。以上のやうなことで下等八級生としての読方は終つたのであるが、これから学年が進むに従ひいろいろな本につき習つたのである。(中略) 明治十二、三年頃と覚ふるが時の県令(今の県知事)岩村通俊氏が巡視として知覧小学校へ来られたことがあるが、この時は遠く松ヶ浦小学校あたりの生徒までも来て今の区裁判所前の道路へ整列して出迎をした事を覚えてゐる。そして県令其の他随行員の臨席の前に学級別に担任教師に引率せられて出て修学態度の検閲を受けたのである。僕等は珠算の口唱加算をやらせられたやうであるが別に級中から二人選抜して一人には皇朝史略、一人には日本外史の或一節の講義をさせられたことを覚えてゐる。*とある。また、第二回卒業生の思い出が、「六十周年記念誌」にあるが、その中にも当時の教育をどう受けたかと言及してあるのであげてみたい。

*十年一昔と云ふことがあるが六十年といへば六昔になる訳である。社会世相の変遷も一通や二通でない明治九年頃知覧小学校が今

の裁判所の所に出来て初めて学級が編成され一ノ席と二ノ席とが出来た。一ノ席の人々は原知覧学館に学んで居た人々で、二ノ席は初めて学校に出た人々が多かった。自分は一二ヶ月は知覧学館に出て居たけれども試験に大学の一章を読ませられ憶して一向読めなかつたから今は故人となつた平田伝君と二人新入生と二ノ席に編入せられた。教科は片仮名から「イトイヌ」と云ふ掛図と12の数字の書方などを習つた間もなく三ノ席も出来た。当時は六ヶ月毎に試験があつて点数の不足したものはどしどし下の席に落し又下の席で成績の良い者は上の席に昇せられた。当時の秀才で今も尚は県下の学者である樋渡君は下の席から昇級した人である。／＼十年戦争の時は先生たちも大方出陣せられたから一時漢字の先生が漢文の講義をせられた。(中略)当時の教科は修身に論語国語に十八史略地理に日本地誌輿地史略とがあり歴史には国史略数学には四則応用問題から比例和較など図画は日本画で卒業試験の時は半紙に富士山の絵を毛筆で書いたことを記憶して居る。書は先生が黒板に書いてそれを習ふ傍ら自分／＼に手本を求めて習つた。或は歐陽詢書千字文の拓本柳公権の楷書趙子昇を用ふるものあり日本書家の佐瀬得所張三州蔵谷一六の書を習ふと云ふ風であった。／＼自分は頗る鈍物で嘗て読書の試験に十八史略の中から摘書した「兵を溜池に弄ぶが如し」と云ふ句の解釈が出来ず殆んど落第しかけた事がある。(以下略)

この二つの懐古談からうかがえることは、当然といえば当然だが、格別むずかしい教育を受けたというふうを感じておられないことである。朝日新聞の今月十月二日(注四十二年)の記事に、必要な漢字は早く教えた方が子どもたちはよく覚えると思つたが、そうす

ると年の若さに比例して漢字への抵抗度が高くなるという一般的な考え方は、あやまっているわけであるから、今私どもが考えるほど抵抗はなかつたかもしれない。しかし教えてもらうことがらを理解できないのは、自分の頭が悪いせいだというふうに考えるのが普通であるから、この場合も多分にそんな考え方をしているのかもしれない。

第一回卒業生の思い出の中に、『当時の入門言語教育の三段階の指導法が如実に示されている。すなわち(一)かなを主とする文字指導と発音指導(二)単語指導(三)連語(短文)指導』(『国語教育史』山根安太郎)である。特に発音の指導法などは、我々が習つた英語の発音指導の方法と変わらないように思われて興味深い。これも教育模索期に、西欧の様式でわが国の教育を制定したためであるらしい。さて、こうして出発した学制は何回もの教育令や、改正令を経て、しだいに形も整い内容そのものも充実してくるわけであるが、『その基本的組織が確立するのは、明治一九年の諸学校令(帝国大令・小学校令・中学校令・師範学校令)によっており、その骨格は昭和二〇年まで維持される。』(山根・前掲書)祖父の小学時代は、ほぼこの政令と期を同じくして出発し、高等小学校読本も、明治二〇年五月に版權の免許を受け、十二月に検定を受けているところから、やはり十九年の学校令に基づいた編纂をしていると思われるので、次にそのことについて述べてみたい。

三 明治十九年の諸学校令と祖父の教科書

まず明治十九年四月十日勅令第十四号をもって制定された小学校令のうち、主な部分をあげてみよう。

小学校令

第一条 小学校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス

第三条 児童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ学齡トシ父母後

見人等ハ其学令児童ヲシテ普通教育ヲ得セシムルノ義務アルモノトス

第四条 父母後見人等ハ其学齡児童ノ尋常小学校ヲ卒ラサル間ハ

就学セシムヘシ其就学ニ関スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ府知

事臬令ノ定ムル所ニ依ル

第五条 疾病家計困窮其他止ムヲ得サル事故ニ由リ児童ヲ就学セ

シムルコト能ハスト認定スルモノニハ府知事臬令其期限ヲ定メテ

就学猶予ヲ許スコトヲ得

第十二条 小学校ノ学科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル。

第十三条 小学校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘ

シ

小学校ノ学科及其程度

第一条 尋常小学校ノ修業年限ヲ四箇年トシ高等小学校ノ修業年

限ヲ四箇年トス。

第二条 尋常小学校ノ学科ハ修身 読書 作文 習字 算術 体

操トス 土地ノ情况ニ因テハ図画唱歌ノ一科若クハ二科ヲ加フル

コトヲ得

第三条 高等小学校ノ学科ハ修身 読書 作文 習字 算術 地

理 歴史 理科 図画 唱歌 体操 裁縫女トス 土地ノ情况ニ

因テハ英語 農業 手工商業一科若クハ二科ヲ加フルコトヲ得唱

歌ハ之ヲ欠クモ妨ケナシ

第九条 各学科ノ毎週授業時間凡左ノ如シ。

尋常小学校 高等小学校

修身 一時三十分 一時三十分

読書 十四時 十時

作文 十四時 十時

習字 十四時 十時

算術 六時 六時

地理 六時 六時

歴史 四時 四時

理科 二時 二時

図画 二時 二時

唱歌 六時 五時

体操 六時 五時

裁縫 六時 二時乃至六時

第十条 各学科ノ程度左ノ如シ。

修身 小学校ニ於テハ内外古今人士ノ善良ノ言行ニ就キ児童ニ適切

ニシテ且理會シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話シ日常ノ作法ヲ教ヘ教

員身自ラ言行ノ模範トナリ児童ヲシテ善ク之ニ習ハシムルヲ以

テ專要トス

読書 尋常小学校ニ於テハ假名 假名ノ單語短句簡易ナル漢字交リ

ノ短句及地理歴史理科ノ事項ヲ交ヘタル漢字交リ文高等小学校

ニ於テハ稍之ヨリ高キ漢字交リ文

作文 尋常小学校科ニ於テハ假名ノ單語短句簡易ナル漢字交リノ短

句漢字交リ文口上書類及日用書類高等小学校ニ於テハ漢字交リ

文及日用書類(以下略)

伊藤博文の推薦を受け文部大臣に就任した文相森有礼の手で制定されたこの教育令は、富国強兵策の実現をめざした国家主義教育が構想の中心で、高等教育の充実よりも庶民の初等教育の発展を重視する方向に転じ、ようやくその制度整備の一段落に到達せしめたものであった。同時に次の教育勅語発布につらなる準備を整え、強力な国家主義教育への発足ともなっていて、明治教育界に一期を画するものであった。しかし国語教育の面から見ると、今までほとんど見るべき変化はない。ただ、第十三条のいわゆる教科書検定条令はこれ以後明治三十七年国定教科書に教科書が一本化されるまで、数多くの民間本の氾濫を招いた。祖父の教科書もその民間本のうち一種である。当時の民間本流布の有様について、山根先生は『国語教育史』の中で次のように言及しておられる。

明治一〇年代に国語読本的組織を編成した教科書類は、二〇年代から三〇年代にかけてさらに発展をかさねる。すでに一〇年代から岡沢徹編『女子小学読本』五冊明治一八年刊、文学社編『簡易読本』六冊明治二二年刊、安積五郎編『小学校用国民読本』八冊明治二五年刊、の類や、内田嘉一郎『小学中等科読本』六冊明治一五年刊、同人編『増訂小学読本高等科』六冊明治一九年刊、文部省編輯局編『小学読本高等科之部』二冊明治一七年刊など、段階に應ずる高程度の教科書・漢文教科書が各方面に特徴のある教科書の分化を示してきていた。明治一九年五月一〇日教科用図書検定条例が発布されて検定時代に入ると、ますます教科書の編纂はさかんになった。一四年の教則大綱の趣旨の具体化として、文部省でも基準的な教科書を刊行して二一年に高等科用までを終了した。国会開設・教育勅語発布などをへて改正小学令の発布や三四年一月の小学校教則大綱の

制定に應じて、在来の教科書の改訂や修正、新編纂などがおこり、このあいだにいろいろの意匠をこらした国語教科書の出版はいちじらしい数にのぼり、一〇年代のものからすれば二百数十種にのぼると推算される。そのすさまじさは、「著者ノ姓名ヲ糺セバ教育社会ニハ声モナク臭モナキノ人多ク」「甚タシキニ至リテハ下宿屋樓上の貧生写字營業ノ人」(『教育報知』六九号明治二〇、六、四刊、一五ペ)までこれにくわわったと悪評を受けるほどで、なかには、大家の名をもちいず、普及舎・文学社・金港堂・学海指針社・国光社などの社名で堂々と編纂するというふうさへもおこった。

祖父の教科書は、前にも述べたが、どうもこのおびただしく出版された教科書のうちの一冊であるようである。池永厚・西村正三郎合著、辻敬之出版、発兌普及舎となっているから、いうところの下宿屋樓上の貧生写字營業の人の手になるのではない。西村正三郎、辻敬之の名は、教科書編集者としてよく何にでも見るのできるなまえであるから、教科書として上等の部類であろうと思われる。それぞれの名前の肩書きに、東京府平民とか埼玉県士族、熊本県士族などあるのは、当時の世相がうかがえる。

次に、この教科書の内容を巻を追ってみたい。

この教科書は全部で八冊あり、その第一に「全書ノ趣向」という題で、教科書編纂の意図が十二項目にわたって述べてあり、第一と第二の巻頭にそれぞれ、三項目と六項目の「例言」を示して各巻の内容、意図を述べてある。また一章毎に、「字解」として難解と思われる単語の解釈がつけられている。また章によってはさらに文法とか、書取、問答、読方なども加えて学習者の便宜をはかっている。

次に「全書ノ趣向」の全文をあげる。

全書ノ趣向

一 此書ハ、高等小学生徒ノ教科用書トシテ編ミタルモノナレトモ、
広ク之ヲ家庭用ノ読本ニ供センコトハ、編者ノ深ク望ム所ナリ。
一 高等小学ハ、満十歳ヨリ始マリ、満十四歳ニ至リテ終ル、合セ
テ四学年ナリ、此書別チテ八巻トナシ、一卷ヲ以テ、半年学ノ課
程ニ充ツ。

一 小学生徒ニ読方ヲ課スルノ目的ハ、文章ヲ媒介トシテ、広ク他
人ノ思想ヲ得セシムルニ在リ。而シテ現今我国ニ行ハル、文章ハ、
其体裁一ナラズ、或ハ俗文アリ、或ハ雅文アリ、漢文直訳ノ体ア
リ、演説筆記ノ体アリ、此書ハ、務メテ諸体ヲ包括シ、其一体ニ
偏セザルコトヲ務ム。

一 一章ト章トノ間ニハ、常ニ関係ヲ存シ、前章ハ後章ヲ解スルノ地
ヲ為シ、後章ハ前章ヲ願ミテ、益其意ヲ悟リ易カラシムルノ用ヲ
為サシメンコトヲ要ス。

一 書中掲クル所ハ、修身・歴史・地理・物理・化学・礦物・生物・
生理・健全・地質等ノ諸学、及各種説話ノ喜フベク、益スベキ者
ヲ蒐集スト雖、毎冊此等ノ事実ヲ合載スルトキハ、混雜ヲ致スノ
恐アリ、故ニ自其間ニ整然タル秩序ヲ存セシム。

一 稍読ミ難キ文ト、読ミ易キ文トヲ、互ニ相錯ヘテ編ヲ成セリ、
是児童ヲシテ、峻ヨリ易ニ就キ、易ヨリ峻ニ至リ、以テ精神ノ變
化アラシメントスルナリ。

一 章末ニ字解ヲ附ス、其意生徒ヲシテ、之ニ依テ自脩ノ便ヲ得セ
シメントスルニ在リ。

一 教師ハ、生徒ヲシテ、読ム所ノ文ヲ明記セシムル為メ、或ハ句
中ノ意義ヲ問答シ、或ハ其要領ヲ書キ取ラシメ、或ハ文法ヲ問ヒ、
或ハ読ム所ノ事実ヲ記憶セシムル等ノ、手段ナカルベカラズ。故

ニ、章末ニ其一端ヲ掲グ、教師其例ニ從ヒテ、毎編工夫アルヲ要ス。
一 章中宜シク高声ニ読ムベキ者アリ、宜シク低声ニ読ムベキモノ
アリ、教師タルモノ、其文義ニ応ジテ、宜ヲ考ヘ、平板ノ音調ヲ
以テ読マシムベカラズ。

一 章中文章ノ平易ナルモノハ、教師先之ニ教フルコトナク、生徒
ヲシテ自之ヲ読マシメ從ヒテ、其誤レル所ヲ正スベシ、斯ノ如ク
スルトキハ、生徒ヲシテ憤勵ノ心ヲ生ゼシムルコト、鮮少ニアラ
ザルナリ。

一 挿画ハ、生徒ヲシテ其実況ヲ想像シ、依リテ趣味ヲ感ゼシムベ
キ者ニシテ、此種ノ読本ニハ、決シテ之ヲ欠クベカラズ、故ニ書
中多ク图画ヲ挿ム。

一 読本ハ、唯ニ文字ヲ知ルノ用ヲ為スノミナラズ、併セテ有用ノ知
識ヲ与ヘ、文学ノ趣味ヲ養ヒ、且美弁ノ術ヲモ教フベキ者ナリ。故
ニ之ヲ教授スルニ当リテ必左ノ三階ノ、歩式ヲ踏マザルベカラズ。
第一 書ヲ開カザルノ前、教師ハ、予將ニ教ヘントスル、文中ノ事項
ヲ、詳細ニ説話シ、児童ヲシテ、十分ニ觀念ヲ得セシメ置クベシ。

第二 生徒既ニ觀念ヲ得ル後、書ヲ開キテ之ヲ読ムコトヲ教ヘ、或ハ
生徒ヲシテ自読マシメ、從ヒテ之ヲ正シ、以テ既ニ得タルノ觀
念ト、文章トヲ連合セシムベシ。

第三 児童既ニ其文ヲ読ムコトヲ知り、觀念ト文章トヲ連合シタル
トキハ、更ニ書ヲ閉ヂテ、教師ト共ニ文中ノ事ヲ対談セシメ、
美ニシテ且力アル語法ヲ以テ、之ヲ語ラシムベシ。

以上であるが、内容から見て児童の学習指針というより、現在に
おける指導要領の役割を果たしているようである。最初の文に、
『広ク之ヲ家庭用ノ読本ニ供セン云々』とあるのは、明治政府の教

育の機会均等の意を汲んでいるのであろうか。また最後の文に、

『美弁ノ術ヲモ教フベキ者ナリ』とあるにも、自由民権運動の盛り上がりにつれて、雄弁の士が活躍していた当時の世相の反映かと思ふ。

その他、教科書の内容に関しては、実際にあたってみることにする。

高等小学読本第一

例言

一 此書ハ、満十才ヨリ、十年六ヶ月ニ至ル児童ノ読ムベキ者ナレバ、其文体モ務メテ平易ナルモノヲ選ビ、漸次高尚ナル文ヲ読ミ得ルノ階梯トス。

一 本邦ノ地理ト、近時ノ歴史トノ要点ヲ知ラシメン為ニ、稍其著キモノヲ挙ゲ、而シテ初ノ二章ハ、其総論ト見做スベキ者ナリ。

一 巻中ニ載セタル、地理・歴史ノ事実ハ、各所ニ散見スト雖、互ニ前後ノ関係アル者ナレバ、一々其前ト参照スルヲ要ス。

と、第一巻の編集態度が示されている。

次に具体的に内容に当たるわけであるが、内容の分類は全書の趣向に従つて私の判断で分けたものであるから、多分に問題があると思ふが、一応私なりに分類してみた。また、文とあるのは、文法、同様にして、書は書取、問は問答、読は読方で、○印がそれぞれの章にこれらが提出されている所である。

第一

章数	題目	文体	中心内容	書問	文読	数頁
一	大日本帝国(一)	漢字カナ交り文	地理		○	1½
二	大日本帝国(二)	(漢演説筆記の体)	歴史		○	2
三	天ハ常ニ人ニ幸セリ	()	説話		○	¾
四	北海道の土人	漢字かな交り文	地理		○	¾
五	満は損を招く	"	修身		○	¾
六	犬	漢字カナ交り文	生物		○	¾
七	義犬其主ノ死ヲ救フ	"	説話		○	¾
八	鳥羽伏見の戦	漢字かな交り文	歴史		○	1 ¼
九	都会に住む者は田舎を知らず	"	修身		○	1 ¼
十	東京	"	地理		○	1 ¼
十一	上野公園	漢文カナ交り文・会話文(アリアマス)	地理		○	1 ¼
十二	東京ノ水道	漢字カナ交り文	歴史		○	1½
十三	小笠原島	"	歴史		○	1½
十四	祖先ノ微賤ナルハ恥ヅルニ足ラズ	"	修身		○	1
十五	国体	漢字かな交り文	修身		○	2
十六	楠正成	漢字カナ交り文	歴史		○	½
十七	西南戦争	"	歴史		○	1½
十八	貝原益軒の略伝	漢字かな交り文	歴史		○	½

第三	一	徳川時代の諸大名	漢字かな交り文	歴	〇	3¼
	二	鷹	漢字カナ交り文	生		1
	三	犬の工夫	漢字かな交り文	説		¾
	四	凝集力及物体ノ三状	漢字カナ交り文	物	〇	1½
	五	童子夢ニ一滴ノ水球トナル	"	説		1¼
	六	榮螺の話	漢字かな交り文	説		¾
	七	義子ノ復讐	漢字カナ交り文	歴		1¼
	八	"	"	史		¾
	九	"	"	史		¾
	十	有形物ノ普有スル性質	"	物	〇	1¼
	十一	二足の蛙の話	漢字かな交り文	説		1
	十二	米船の来航	漢字カナ交り文	歴	〇	1½
	十三	重力及引力	"	物	〇	1½
	十四	鶴と鶉との説	漢字かな交り文	説		¾
	十五	扶老鳥	漢字カナ交り文	生		1
	十六	飯条約	"	歴	〇	1½
	十七	ゴールド氏ノ自伝	"	説		1
	十八	ゴールド氏の自伝	"	説		2¾
	十九	大功業ヲ立ツル人ハ粗心ナラズ	" (太田元貞)	修身		2¾

第四	二十	權衡	漢字カナ交り文	物	〇	¾
	二十一	一字を知らぬ不自由	漢字かな交り文	修身		¾
	二十二	陰	" (貞原篤信)	説		1½
	二十三	鼠と麩	漢字カナ交り文	説		1
	二十四	物体ノ稠度及比重	"	物	〇	1¼
	二十五	鴛鴦	"	生		1
	二十六	液体ノ圧力	"	物	〇	2
	二十七	匹夫和歌を能くして賞を受く	漢字かな交り文	説		¾
	一	南北朝及足利織田豊臣時代	漢字カナ交り文	歴		1¼
	二	"	"	"		1
	三	"	"	"		1
	四	運動量	"	物	〇	¾
	五	先孝の教訓	漢字カナ交り文	修身		½
	六	先妣の事を記す (新井君美)	" ()	隨筆		1½
	七	馴象	漢字カナ交り文	生		1
	八	フランクリン	漢字かな交り文	説		2
	九	幼時の話ノ合戦桶狭間の合戦を記す	漢字かな交り文	歴		1
	十	動物の勢力	漢字カナ交り文	物	〇	1½
	十一	姉妹の心掛 (一)	漢字かな交り文	説		2¾

十二	姉妹の心掛(二)	漢字カナ交り文	説話	〇	1½
十三	迷途	漢字カナ交り文	隨筆	〇	¾
十四	誠ヲ子孫ニ遺スノ書	"(中村和)	修身	〇	2¼
十五	小早川隆景明兵ヲ碧蹄駅ニ破ル	"	歴史	〇	¾
十六	風月の談話	漢字かな交り雅文(述斎偶筆)	隨筆	〇	¾
十七	四季の歌	"和歌(萩原弘濟)	国文学	〇	½
十八	空気	漢字カナ交り文	化学	〇	1½
十九	梅を栽うる事	漢字かな交り文(宮崎安貞)	生物	〇	¾
二十	孝子二郎伝	漢字カナ交り文(芳野世育)	修身	〇	1¼
二十一	蔚山ノ戦(一)	"	歴史	〇	1½
二十二	"(二)	"	歴史	〇	2
二十三	蟻ノ戦闘(一)	"	生物	〇	1
二十四	"(二)	"	"	〇	1
二十五	水蒸気	"	物理	〇	¾
二十六	ハブシ其家ヲ興シタル所以ヲ語ル(一)	"	説話	〇	2¼
二十七	"(二)	"	"	〇	1½
二十八	"(三)	"	"	〇	1¾
第五					
一	応仁ノ乱(上)	漢字カナ交り文	歴史	〇	4¾
二	応仁ノ乱(下)	"	歴史	〇	

二十三	温波	"	物理	〇	¾
二十二	小吏ノ滑稽能ク訴ヲ折ク	漢字カナ交り文	説話	〇	1
二十一	旅行の楽(楽訓)	漢字かな交り文(貞原篤信)	隨筆	〇	½
二十	エーテル熱ト光トヲ伝フ	"	物理	〇	1¼
十九	歟及村莊ノ記	"	隨筆	〇	1¼
十八	蜂ノ刺	"	説話	〇	½
十七	太陽ノ大サ	漢字カナ交り文	物理	〇	1¾
十六	珈琲の話	"	隨筆	〇	1¾
十五	心を求めず(鶏犬を求めて)	漢字かな交り文	歴史	〇	¾
十四	分子ノ振動(音ノ光ノ熱)	"	物理	〇	1½
十三	蛇	"	生物	〇	1¼
十二	鎌倉時代	"	歴史	〇	2¾
十一	霜及結晶	漢字カナ交り文	物理	〇	1
十	女の予讀	漢字かな交り文	修身	〇	2¾
九	家族の心得	漢字カナ交り文	修身	〇	2
八	氷	"	物理	〇	2
七	鉄坊主ノ伝	"(安井衝)	説話	〇	2½
六	雨	漢字カナ交り文	物理	〇	1¼
五	隅田川の歌	"	隨筆	〇	½
四	茶の話	漢字変体仮名文	国文学	〇	2¾
三	艱難中ノ真情	漢字カナ交り文	説話	〇	½

二十四	海	狸	漢字カナ交り文	〇	1¼
二十五	馬場信房居士を敬す	説話	漢字かな交り文	〇	¾
二十六	客に接する心得	修身	〃 (貝原篤信)	〇	¾
二十七	人各々得失ある事	修身	〃 (〃)	〇	¾
二十八	勤儉ナル人能ク事業ヲ成ス	修身	漢字かな交り文	〇	¾
二十九	写真ノ理	物理	〃	〇	¾
第六					
一	中古ノ時代(一)	歴史	漢字カナ交り文	〇	
二	中古ノ時代(二)	歴史	〃	〇	5¼
三	中古ノ時代(三)	歴史	〃	〇	
四	水ノ構造	物理	〃	〇	
五	演劇に感じて品行を改む	説話	漢字かな交り文	〇	1½
六	獸骨ノ用	その他	漢字カナ交り文	〇	1½
七	富士山ノ図ニ題ス	随筆	〃 (古加 燾)	〇	¾
八	蝶	生物	〃	〇	¾
九	天津日嗣の歌	国文学	変体仮名、和歌	〇	¾
十	水ノ分子	物理	漢字カナ交り文	〇	1¼
十一	反対なる兄弟	説話	漢字かな交り文	〇	1½
十二	古戦場	随筆	漢字変体仮名雅文 (河内 骸子)	〇	2¼
十三	火山	地質	漢字カナ交り文	〇	1¾
十四	蕎麦ヲ嚙ク者ノ伝	説話	漢字カナ交り文 (中井 履軒)	〇	1
十五	奇異ノ肥虫	説話	漢字カナ交り文 (中井 履軒)	〇	2½
十六	義経ノ機智	説話	漢字カナ交り文 (中井 履軒)	〇	¾
十七	砂糖ノ話	その他	漢字かな交り文	〇	1½
十八	私欲ノ問答	説話	漢字かな交り文	〇	¾
十九	水銀ノ原子	物理	漢字カナ交り文	〇	1
二十	倫敦ノ小童(一)	説話	〃	〇	1½
二十一	倫敦ノ小童(二)	説話	〃	〇	1½
二十二	流星ニヨリテ空ノ高サヲ知ル	物理	〃	〇	1
二十三	乳母ノ忠節	説話	漢字かな交り文	〇	2
二十四	空氣ノ重量ヲ測ル法	物理	漢字カナ交り文	〇	1¼
二十五	孝子狂犬を撲殺す	説話	漢字かな交り文	〇	1¾
二十六	海陸風	物理	漢字かな交り文	〇	¾
第七					
一	上古ノ時代(一)	歴史	漢字カナ交り文	〇	
二	上古ノ時代(二)	歴史	〃	〇	3
三	狼の危難(上)	説話	漢字かな交り文	〇	
四	狼の危難(下)	説話	〃	〇	2¾
五	化合及元素	化学	漢字カナ交り文	〇	
六	熊	説話	漢字変体仮名交り文	〇	¾

二十七	奇ナル鳥巢	漢字カナ交り文	化学	〇	1½
二十六	" (下)	"	說話	〇	1½
二十五	遇 夫婦兄弟ノ奇 (上)	"	說話	〇	1½
二十四	鐘 乳 石	漢字変体假名雅文 (橋千陰)	地質	〇	1½
二十三	竹 の 歌	漢字変体假名雅文 (橋千陰)	国文学	〇	2¼
二十二	五家ノ荘	"	その他	〇	2¼
二十一	雨滴土柱ヲ作ル	漢字カナ交り文	地質	〇	2¼
二十	烟 草 說	漢字カナ交り文	說話	〇	2¼
十九	二 獅 児	漢字かな交り文	說話	〇	2¼
十八	塵埃の用	"	物理	〇	2¼
十七	日 嚙 喻	"	修身	〇	2¼
十六	筏 蜘蛛	漢字カナ交り文	生物	〇	2¼
十五	愛子の藪入	漢字かな交り文	說話	〇	2¼
十四	炭素及炭酸	漢字カナ交り文	化学	〇	2¼
十三	衣服の語	漢字かな交り文	その他	〇	2¼
十二	毒ヲ以テ毒ヲ制ス	漢字カナ交り文	說話	〇	2¼
十一	暮 秋 掃 衣	漢字変体假名雅文 (横山由清)	国文学	〇	2¼
十	水 素	漢字カナ交り文	化学	〇	2¼
九	人の労働	漢字かな交り文	修身	〇	2¼
八	猫 狗 說	"	說話	〇	2¼
七	酸 素	漢字カナ交り文	化学	〇	2¼

二十八	溪谷ノ成ル所以	"	地質	〇	¾
第八	鰯	漢字カナ交り文	生物	〇	¾
一	慢心の童子	漢字かな交り文	說話	〇	¾
二	秋のくりこと	漢字変体假名文 (河内秋子)	隨筆	〇	¾
三	豊楽亭記	漢字直訳の体 (歐陽修)	隨筆	〇	¾
四	鷲	漢字カナ交り文	生物	〇	¾
五	義 鼠	漢字カナ交り文	說話	〇	¾
六	紅 葉 日 記	漢字変体假名文 (荻原巖雄)	隨筆	〇	¾
七	貴公子ノ悪戯	漢字カナ交り文	隨筆	〇	¾
八	植物ノ成分	"	說話	〇	¾
九	醫師ノ配劑頭姑 悍婦ヲ治療ス	"	生物	〇	¾
十	惜 落 花	漢字かな交り文 (横山由清)	隨筆	〇	¾
十一	納 涼 の 記	漢字変体假名文 (荻原巖雄)	隨筆	〇	¾
十二	動物ノ成分	漢字カナ交り文	化学	〇	¾
十三	協力及分業ノ利益	"	その他	〇	¾
十四	將軍呉六一	"	國文学	〇	¾
十五	策 策 の 歌	漢字変体假名文	說話	〇	¾
十六	童 区 寄 伝	漢字直訳の文	國文学	〇	¾
十七	石炭坑ノ探訪	漢字カナ交り文	鉦物	〇	¾

十九	遣唐使虎を殺す	漢字変体仮名文 (宇治拾遺物語)	説話	3/4
二十	梶原景時生田森 二度のかけ	漢字かな交り文 (源平盛衰記)	国文学	1 1/2
二十一	宇野阿王恩二感 ジテ僧ト為ル	漢字かな交り文	説話	1
二十二	石炭トナリタル植物(一)	"	生物	3/4
二十三	" (二)	"	"	3/4
二十四	義 犬	"	説話	3/4
二十五	後三条天皇	漢字かな交り文 (神皇正統記)	歴史	3/4
二十六	巧者王承福伝	漢文直訳の文 (韓愈)	説話	2
二十七	関節及骨二関 スル衛生	漢字カナ交り文	健全	1 1/2
二十八	道 徳	漢字かな交り文 (徒然草)	修身	3/4
二十九	後醍醐天皇第 九の皇子	" (太平記)	国文学	1 1/4
三十	食物消化ニ関 スル衛生	漢字カナ交り文	健全	2 1/4
三十一	奢を戒る談話	漢字かな交り文 (述斎偶筆)	修身	1 1/2

以上、教科書八巻の結果を表にまとめてみると次ページのような結果になる。

左の表から学年が進むにつれて、教材もはば広く取り入れられていくさまがうかがえる。中でも高学年になるほど随筆や、和歌などの純文学的作品の全体に占める割合が増えている点が注目されるが、影は薄い。というのも訓話的な説話教材が、同時に読物としても読まれているからではなからうか。

文体、表記については、別に分野による区別ということはないように思われる。(ただし、国文学的教材はすべて漢字ひらがな交り文であって、しかも他の分野の漢字ひらがな文とは字形を変えて印刷してある。)特に「……デアリマス」の演説口調を取り入れられたり、会話的な様式を取り入れたりして腐心してあるが、数の上からいっただらほんの一部分にすぎない。

章の題目の中に「北海道の土人」というのがあるが、今日の目でみると「土人」という言葉は、軽蔑の意味が含まれているように思われるけれども、当時の感覚としてはどうであったのだろうか。それから、最初の「全書ノ趣向」の所で、子供たちばかりでなく大人の読本にもなるよう編集した旨あったが、なるほど内容としては大人に読ませる方がよいと思われるものがいくつもあった。「愛子の贖入」などがそうである。また、訓話的説話の中には、孝子孝女の話、忠実な女中の話など圧倒的に多いが、中には、「祖先ノ微賤ナルハ恥ヅルニ足ラス」というような、新時代の息吹きの感じられるものもみられる。

次にこの本の特徴の一つと思われる、字解・問答・書取・読方のことにふれてみよう。字解は、その章に出た難解語句の語釈である。ほんの短い文章などは一語もあげてないものもあるし、多いところでは三十以上ある章もあり、普通、十前後あげてある。語釈は簡

計 章 数	計 頁 数	そ の 他	国 文 学	随 筆	説 話	地 質	健 全	生 理	生 物	鉱 物	化 学	物 理	地 理	歴 史	修 身	主 たる 内 容	巻
28					5				2				7	7	7		1
33					20%				6%				26%	22%	26%		
30	1			1	13	1		1				5	1	3	4		2
34	4%			3%	46%	3%		1%				13%	3%	19%	8%		
27					9				3			6		6	3		3
34					32%				9%			23%		28%	8%		
28			1	3	6				4		1	3		7	3		4
35.5			2%	9%	31%				10%		4%	9%		24%	11%		
29			1	4	5				2			8		4	5		5
37.5			6%	10%	14%				7%			27%		20%	16%		
26	2	1	2	10	1				1			6		3			6
35	6%	2%	5%	43%	5%				3%			19%		17%			
28	2	2		10	3				2		4	1		2	2		7
39	7%	5%		37%	7%				9%		14%	6%		8%	7%		
31	1	3	5	10			2		5	1	1			1	2		8
40	7%	8%	13%	27%			9%		18%	4%	6%			2%	6%		
227	6	8	15	68	5	2	1	19	1	6	29	8	33	26		計	
288																	

(上段は項目の数 下段は頁数の百分比)

単に文章の意味が通じる程度加えてあるのであるが、説明してある言葉が、またむずかしそうに思われるところもままある。

文法は、いわゆる文法事項に関する時もあり必ずしもそうでない場合もある。例をあげる。

① 言葉の説明

イ、幾多ナルヲ知ラズトハ、其数ノ多キコトヲ一キハ甚シク云フナリ、枚挙に遑アラズト云フモ、上ノ語法ト同ジク其甚多キヲ云フナリ。

ロ、偶ト適トハ共ニタマタマト読メドモ偶ハ計ラズトイフ意ニシテ、適ハ、テウドト云フ意ナレバ、少シク区別アルヲ知ルベシ。

乃則即ノ三字、共ニスナハチト読ミテ意味ハ各別ナリ。乃ハソコデト訳シ則ハ、トキハト訳シ即ハ、ヤガテト訳シ、又取モ直サズト訳ス、故ニ其用法各同一ナラズ。

② 文法的な説明

イ、句ノ末ニ在ルぬハ、如何ナラ時ヲ現スヤ。(答過去) 結語キト云フ過去ノ詞ヲ用フベキ所ニシテ用フルコト勿レ、シハ掛リ言葉ニノミ用フベシ。

ロ、唯トノミナラズトハ関係アル文法ナリ。況ンヤノ用法ヲ学ベ、遂ニノ用法ヲ学ベ。

このように要点、注意などをあげてあるのだが、学年が進むにつれて少なくなっていることは、他の、書取・読方などと同様である。

次に問答であるが、特にこれは、社会的教材や、理科的教材に多く付してあり、そこで学んだ要点を問の形で改めて学習者に念を押している。

読方は第一巻ではほとんどの章にあるが、後漸次少なくなっていく

る。読方を、その類型に分けてみると次の通りである。

① 高誦快読スルニ宜シ

特に修身・説話・歴史的教材に多い。

② 一高・一低以テ形容ノ状ニ合スベキヲ要ス

説話・修身に多い。

③ 稍談話の声調ニ合シ、単読シテ平静ナルベシ

説話・修身に多い。

④ 務メテ優美ニシテ静安ナル声調ヲ用フ

国文学的教材と説話の中でも悲劇的要素の教材に多い。

⑤ 単読低声ニシテ鄭重ナルベシ

「……訓」とかの修身的教材とか、折たく柴の記など古人の言、伝記的なものに多い。

大きく分けて以上のようなになる。

全体的に、この教科書はいろいろ工夫して学習者の便宜を考えてあり、教材も極端に偏っていない点などをみて、いい教科書であったのではないかと思う。

四、おわりに

いろいろ述べてきたが、むだなところ、適當を欠く箇所も少なくないように思われる。しかし私にとっては、祖父の時代を考え自分自身を考え、またこれからの教育に思いを馳せ、収穫が少なくなかった。

参考にした本

「高等小学読本」 池永厚 西村正三郎合著 ・ 明治20・12・20(第二)、明治21・2・21(第八) 文部省検定

「大日本小学教科書総覧」 下巻、小教編纂所編、昭和8・12・10、厚生閣書店

「小林市史 文教編」

「知覧小学校五十周年記念誌」 知覧尋常高等小学校同窓会、大正15・5・10

「知覧小学校六十周年記念誌」 昭和11・10・11

「明治以降 教育制度発達史」 第三卷、教育史編纂会、昭和13・9・15(初)、昭和39・10・10(重)、教育資料調査会

「国語教育史」 山根安太郎先生著・昭和41・3・20、溝本積善館

(執筆時本学四年生、現、鹿児島県立鹿屋農業高校吾平分校教諭)